

住处と星 — サン＝テグジュペリ『人間の土地』試論 —

安 井 信 子

The House and Stars in *Terre des Hommes* by Saint-Exupéry

Nobuko YASUI

キーワード：星，牢獄，解放，繋がり，住处，遊び

概 要

サン＝テグジュペリは『星の王子様』で知られているが、彼の傑作『人間の土地』には彼の魅力と主張が最もよく表されている。郵便飛行士として星と砂漠と危険に満ちた歳月を送った彼は、その体験を通して、人間ははかなく狭い世界から解放され、いかに広く自由な喜びの人生を生きうるかを語る。危機を契機として人々の心が本当に繋がるとき、解放された囚人のように呼吸できること、生死を超えた喜びを覚えることを、彼の作品は読者の身体に直接伝えてくる。

はじめに

『星の王子様』の著者、サン＝テグジュペリという飛行士は広く知られている。彼が生まれたのは1900年である。チャールズ・リンドバーグの生誕は1902年。ライト兄弟が飛行に成功したのが1904年。欧米で飛行熱が高まり、やがてリンドバーグが大西洋単独横断飛行を成し遂げるのが1927年である。生命の危険を承知で多くの人が空に惹かれ空を飛んだ。地表から空へ、それまでの世界から新しい世界へ、飛び出したいという人間の欲求が、当時は特に強かった時代なのか。ちょうど十五世紀の新大陸発見の時代に、ヨーロッパから多量に船出したときのように、そのとき船乗りたちは世界が丸いことを知り、ヨーロッパ以外の地域が搾取できることを知った。では大空から地表を俯瞰し、短時間で大陸間を飛び、世界を繋ぐ飛行士たちは何を発見したのだろう。中でも危険をものともせず、雄弁にその体験を綴ってくれたサン＝テグジュペリ（以下サンテクスと略す）の『人間の土地』を見てみよう。

(1) 牢 獄 と 星

郵便飛行機の操縦士として、アフリカまで初飛行を

命じられた時、サンテクスから見れば空を飛ばない人々——というより、正確に言うと、狭い生活に閉じこもり、人生の可能性を窒息させ、自己を十分に生きていない人は何とも悲惨だった。彼は飛行場に向かうバスに乗り合わせた人々を眺める。彼らは書記、税関吏、主任などの事務員だ。そのサラリーマンたちの話を小耳にはさむと、それは「病氣、お金のこと、世帯の苦勞」についてであり、「自らを閉めこんだ生気のない牢獄の壁」を示していた。その牢獄から、ついに何ものも彼らを「逃して (évasion) はくれなかった」のだ。それは彼らが「白蟻のように光明へのあらゆる出口をセメントでむやみに塞ぐことで」作った牢獄である。彼らは「自分のブルジョア流の安全 (sécurité) と習慣 (routines) のうちに、自分の田舎暮らしの息づまりのような儀礼のうちに、体を小さく丸めてもぐりこんでしまった。」彼らは「風に、潮に、星に対して、このつましい保塁を築いてしまった。」「彼らが作られている粘土は乾いて、固くなってしまっていて、今後内部に宿っていたかもしれない眠れる音楽家を、詩人を、天文家を、目覚めさせることは絶対にできなくなってしまった。」(20)

この下りを読んで全く身に覚えのない読者がいるだろうか。今の生活から解き放たれ、大きく外部に向かって広がりたいという願望が、微かでも湧かない人がいるだろうか。誰しも心の奥に、解放、飛翔、開放、成長の欲求を備え持っている。だから、この文章は読

(平成16年10月4日受理)

川崎短期大学 一般教養

Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

者を初々しい操縦士の飛行に引き込むのだ。サンテクスは誇らしい緊張のうちに、飛行が「一つの世界を開いてくれる」のを、やがて「黒い龍と青い稲妻を王冠のように戴いた高い峰々に直面する」のを待ち望む。その世界の中で、「夜ともなれば星々の間に自分の道を読み取るだろう。」(21) 現代のように航空術が発達し、いわば「実験室に閉じこもって」計器の数字を読み修正するような操縦とは異なり、サンテクス頃の飛行は危険度が高かった。飛行機自体も原始的で、操縦士は風、雨、寒気など大自然にもろに晒された。無線の連絡もきわめて不十分で、連絡が絶え、「現実の世界の限界から飛び出してしまい」、もう戻れないと覚悟した空の旅も幾度もあった。そういうときは「唯一真実の、僕らの遊星、親しい風景、懐かしい家々、僕らの愛情をいなく遊星」(25) を求めて、星と闇の中を進み続けるのだった。

それでも飛行士たちは空を飛ぶことを愛した。飛行には何もののにも代えがたい喜びがあったからだ。たとえば、場所も方向も見失って既に生還のチャンスが極めて少ないというときに、カサブランカ飛行場から遅れて無電が届き、「貴殿が格納庫の近くで方向転換したのでバリーに懲戒を申請した」という小役人の小言だとわかったとき、彼は思いのほか「突如喜びを感じ(soudaine jubilation)」,「ここ天外では僕らは自由だ(Ici, nous étions les maîtres……)」(27) と実感する。彼は「牢獄」の人生を送る人々をよく「白蟻」や「奴隷」にたとえるが、空を飛ぶときはその反対に、人は「自由(己の主人)」なのだ。それは個人の恣意的な自由ではない。飛行は職業であるから任務があり、多くの人の郵便物を届けるという義務は重い。その「職業の強制する必要が、世界を改変し、世界を豊富にする」のだ。「自分の耕地の見回りをする農夫が、様々な兆しによって、春の近づきを、霜の脅威を、雨の催いを見て取ると同じく」、職業操縦士も自然界を眺め、「自分の郵便物を、山、海、雷と名のつく、この三つの劫初以来の神々に対して争う。」(30) 農夫が自然と耕作によって支えられるように、操縦士は天地と職務によって支えられ、無意味な鎖に縛られていない。牢獄から自由であるとはそういう意味だ。

なぜサンテクスは、殆どの人間の住む所は牢獄だと痛感したのか。牢獄で一生涯を過ごす者にはそこが牢獄だとはわからない。脱獄して初めて牢獄だとわかるのだが、ただ脱獄する人はごく少ないのだ。彼の言葉を借りると「道路は不毛の土地や……砂漠を避けて通

る。」道路から離れ、地表から飛び立つまで「僕らは長い間自分たちの牢獄の姿を美化してきた。この地球を、僕らは、湿潤なやさしいものとばかり思い込んできた。」しかし「飛行機のおかげで僕らは直線を知った。僕らは……道路を棄てる。」そして大空の遥かな高さから、「地表の大部分が岩石、砂原、塩の集積」であり、人間の住む場所が「廃墟の中に生え残るわずかな苔」(55) のようにちっぽけなものだという事実を発見する。例えば世界最南端の市、プンタ・アレナスは、空から見れば、「原始の溶岩と南氷洋の氷との間に、かりそめの僅かばかりの泥をたよりに存在している」にすぎない。幾つも連なる噴火口のすぐ近くにあるこの町は「住みうる時間が、地質学上の一時代、多くの日のうちで祝福されたほんの一日の短い時間に限られている」。「何とはかない舞台……」,「まだほとぼりも冷めきらぬ溶岩の上に、かりそめに住みついたかと思うと、早くも次回の噴火の砂に、雪の猛威に脅かされている人間」, その文明は「脆弱な鍍金でしかない」。(58) 大自然の悠久の中であって、人間の住処がいかににはかないものであるかを、飛行士は目の当たりに見る。

さらに、人間のはかなさを教えるのは空から見る空間的把握だけではない。飛行士は飛行、移動が日常である。サハラ操縦士として、幾年も故郷に帰ることなく働き続けたサンテクスは、町の定住生活からは遠く隔たっていた。砂漠における三年間が彼に孤独の味を教えた。砂漠では自分が年を取ることは気にならない、と彼は言う。ただ「自分から遠い所で」世界全体が年を取っていく感じがする。果実は熟し、麦は芽吹き、女たちは妙齢となり、「季節は進む、そして自分は遠い所に留め置かれる。」「時間の流れは普通、人間には感じられない。彼らはかりそめの平和のうちに生きている。ところが僕らにはそれが感じられるのであった」。(76) 彼はそれを夜の闇の中を行く急行列車の旅客にたとえる。旅客は車窓の外に現れては消え去る灯影が見えるばかりで、外界を捉えその中に入ることができない。ちょうどそのように、砂漠と空の旅人ははかない地上の定住生活を外部から見るばかりだ。両者が異なる時間系列に属しているかのように、永遠の星々を信号とする砂漠と空の世界から、サンテクスは人間の住処の「かりそめの」平和を、つまり人間世界のすべては移ろい消え去りゆくことを、否応なく見つめる。このはかなさ、諸行無常の中に泡のように消える人生を、彼は牢獄と呼んだのである。

読者が彼の著作に魅せられるのは、この牢獄からの

解放の糸口を与えてくれるからだ。たとえば彼は、日常生活の中で人々が失っている俯瞰の視点を与え、「宇宙的な尺度」(55)で生き生きと世界を描いてくれる。

「何県の何町に住んでいる」と思っている読者に、「僕らは一個の遊星の上に住んでいる」と彼は言う。それは観念でも理念でもなく純然たる実感だ。サハラ縁に点在する「円錐形の底部の形をした丘」に不時着した彼は、「いまだかつて一度も、獣類にも人間にも汚されたことのないこの土地」、「劫初の初めからただの一本の草も生えたことのないこの北極の氷山のようなものの上で」、輝き始めた一つの星に眺め入る。「この純白の地面は、ただ星々の前にだけ、幾千万年以来捧げられていたのだ、澄んだ空の下に広げられたしみ一つない卓布。」(61) そのとき彼は二十メートルほど先に黒い一つの石を発見する。胸をどきつかせながら拾いあげると、それは「涙の形をした、金属のように重い、拳大の黒い一個の隕石だった。」「星空の下に広げられた卓布の上には、星の粉しか落ちてこない。もっと他にも落ちたはず」と推測した彼がさらに探してみると、およそ一エクターに一個の割合で隕石を拾い集めることができた。こうして彼は「千万年を一瞬に圧縮して」悠々たる星の大雨を眺める。余りにも印象的なこの場面は、我々が星々に囲まれた地球の上にいることをありありと実感させてくれる。永遠なる星々、悠久の宇宙にふと思いを馳せるこのとき、読者は牢獄からいつとき解放されるのだ。

(2) 人間の繋がり

サンテクスが惹きつけられたのは、砂漠、星空、人跡未踏の野性の自然という無人の空間ばかりではなかった。そういう領域で航空路線を築いた勇敢な僚友たちとの繋がりを、彼は心から愛していた。第二章「僚友」では三つの話が語られる。初めは、常に最前線を開拓し、十二年後に消息を経ったメルモスと、他の僚友たちへの賛歌だ。「パリからサンチャゴにかけて散り散りになって働く」仲間を、彼は「職務上の一大家族の散在するメンバー」と呼び、「ある一つの職業の偉大さは、それが人と人を親和させる(unir des hommes＝人間たちを繋ぐ)点にあるかもしれない。真の贅沢とは、唯一つしかない、それは人間関係の贅沢だ」(35)と言い切っている。次に、そうした人間の繋がりを鮮明に感じさせてくれた、印象的な砂漠の一夜の話がある。ある日彼は機の故障のため僚友たちと砂漠に不時着した。当時サハラでは不帰順モール人が匪賊となっ

てヨーロッパ人を攻撃し、不時着した飛行士たちが虐殺されることもまれではなかった。そこで彼らは空き箱を円形に並べ、一本ずつ小さな蠟燭を灯し、「砂漠の只中に、地球の裸の生地の上に、世界の初年のような人気無さの中に、一つの人間の村を作り出し」、「これが最後になるかもしれない徹夜を始めた。」「風と砂と星々」の他には何一つ持たぬ彼らは、思い出を語り、冗談を言い、歌いあい、「祝祭で与えるあの晴れやかな感激」を味わい、「目に見えない財宝を分かち合った。」人々はお互いに親しいと思って暮らしているかもしれないが、実は各々の世界に閉じこもっていたり、馴れ合いの意味もない言葉を交わすだけだったりする。しかし一旦危険に直面すると、人はお互いに「一つの協同団体(une communauté)の一員」であることを発見し、他人の心に触れて自らを豊富にする。「そのとき、人は似ている、海の広大なのに驚く解放された囚人に。」(37)

また彼が本書を捧げた僚友ギヨメが、冬のアンデス山中で遭難し奇跡の生還をした最後の挿話を、読者は忘れることができないだろう。氷点下四十度の中、ただ一人機体の下で二晩待ち、五日と四晩歩くという「どんな動物もなしえなかった」ことをギヨメはした。読者の心を打つのは、彼にそうさせたのが強烈な生存への欲望ではなく、人々への愛だったという事実だ。凍傷は悪化し、次第に体力も気力も失い、ただ眠りたいとだけ感じる氷雪の中で、「妻や僚友は僕が歩いていると信じている、信頼している。それなのに歩かなかったりしたら、僕は意気地なしだ」という思いだけが彼を歩かせた。いよいよ希望がなくなったとき、「失踪の場合、法律上の死の認定は四年後になる」、少しでも早く発見され、保険で妻が窮乏から救われるようにあの岩まで歩こう、そう決意して歩き、ついに救助された。自分一人ならば楽な道を選び、眠って凍死していたに違いない。人のためにこそ苦難を乗り越えようとする力が引き出されるのだ。心の底の底で人間を支えるのは他者への愛であるということを彼の体験は克明にわからせてくれる。ギヨメの偉大さは、自己、職務、待っている人々に対する責任を持つ所にある、とサンテクスは言う。「人間であるということは、とりもなおさず責任を持つことだ。……自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担すると感じることだ。」(48)

さて以上の三つの例には共通するものがある。それは死が間近に迫る状況の中で、いっそう人間の繋がりの深度が理解されるという点だ。第一の例では、操縦

士たちの友愛においては、彼らがサラリーマンの牢獄から自由な僚友であるというだけでなく、彼らがいつ不帰の人になるかわからないという脅威によって、互いの生還と友情の尊さが絶えず鋭く感じられる。第二では、不時着した乗組員たちは、夜明けにやってくるのが救助か虐殺かわからないと覚悟して、完璧な人間の繋がり一夜を体験する。何の危険も無い不時着ならば、ここまで心を開いたひとときを共有することはなかっただろう。第三では、ギョメは絶体絶命の状況に陥って初めて、人々や仕事と自分が深く結ばれていること、他者への愛と責任感が最重要であったことに気づく。これらの例が示すように、人間は死を目前にして、自分という一個の人間が消滅する極限まで来て、ようやく自我という牢獄が破れるチャンスを持つらしい。牢獄から出ると、自分という存在の核心が他者と深い愛で繋がっていること、それこそが生きるものの本質であり、人生に意味を与えるものであることに気づくのだ。飛行士たちは常住そういう危険に、つまり気づきのチャンスに晒される人々であった。

(3) 遊 び

危険は飛行だけに限らず、砂漠自体にもあった。生き物を拒むこの苛酷な砂の堆積の上で、不時着して発見されなければ、間もなく間違いなく骸となる。その上当時、孤立した各哨所のフランス人と不帰順民は戦闘を繰り返しており、砂漠は烈しい脅威に満ちていた。「そのくせ僕らは砂漠を愛したものだ。一見、砂漠は空虚と沈黙にすぎないかもしれないが、それは砂漠が日の浅い恋人には身を任せないからだ。」身を捨ててこちらからその中に踏み込んで行き、内部に触れなければ何もわからない。「人間の帝国は、心の内部にある。」(77) 彼が愛したのは物理的砂漠もさることながら、そこに見られる「心の内部」の「人間の帝国」であった。いつ死が降りかかるかわからない「この脅威が僕らの心に気高さを取り戻してくれ」、「砂漠を荘厳なものにしてくれた」。(82) (不帰順モール人とフランスの間には交渉があり、サンテクスは知人たちの証言によれば彼らの親愛と尊敬を勝ち得ていたという。) 彼は、勇猛なフランス軍大尉に敢然と立ち向かうモール人、ムーヤンに感嘆した。戦い始めてから、アラールの神の威信が彼の人間を変え、彼を崇高にした。サンテクスは「自分の自由を護るのでもなく(なぜかというに砂漠の中では人は常に自由だから)、目の財宝を護るのでもなく(なぜかというに砂漠は赤裸だから)、

一個人知れぬ王国を護っているこのモール人を賞賛する」(92)と書いている。

これは死を軽んじ、危険を好む軽薄、蛮勇とは全く異なる。ここで彼が言う「帝国」「王国」とは、ある種の民主主義国家に見られるマイホームの集合ではなく、単なる「自分の自由」や「財宝」、つまり自我や我欲を遙かに超えた何かのために、神のために、人々が献身して成り立つ世界のことである。そのために自己の命を懸けるときっぱりと決意し、一種の自我超越をしてしまった人々に対して、彼は賞賛を惜しまなかったのだ。それを彼は時として「遊び(jeu)」と呼ぶ。これは決して勤勉や真面目に相反する意味での、片手間の遊びではない。「僕らは砂漠というこの遊びのルールを認めたのだ。……サハラ砂漠がその姿を見せるのは、僕らの内部においてである。砂漠へ近づくということは、オアシスを訪ねることではなくて、一つの泉を僕らの宗教にすることだ。」(77)「帝国」「王国」は個人を超えた存在を、すなわち神を戴く世界であり、「遊び」は「宗教」への道程なのだ。「これが砂漠だ。もともと遊びのルールにすぎない一冊のコーランが、砂漠を王国に変えてしまう。……砂漠の真の生活は……ここへ来てまでなお行なわれる遊びだ。」そして「これはあらゆる人間について言えるのではないか？」と彼は問う。

彼は「子供時代の遊びのことを、僕らがさまざまな神々が住んでいると信じていた暗くそして金色の(sombre et doré)あの庭園を、……知り尽くすことのできなかった無辺際(sans limites)あの王国を」思い出す。未知で危険を潜めているがゆえに「暗く」、命と喜びに溢れているゆえに「金色の」庭園、この果てしない王国には無限性があつた。大人になって帰郷し、子供時代の庭園の小ささに驚くとき、人は気づく、「あの無窮(cet infini)の中に自分はもう二度とは入りえないと、なぜかというに入らなければならないのは、あの遊びの中であって、あの庭園の中ではないのだから。」(108) 子供のときのように、自我を忘れ、無我の中で、無限に広がっていく「遊び」、生きる喜び。それは棟方志功の『板極道』の言葉を思い出させる。

板画ニ熱中イタシマシタコトカラ、大体ミンナノ方々ニ、悪ヲカサネテ来タト、ワビテイマス。親ニハ不孝、妻子ニモ、未ダ不善ヲツヅケテイル極道モノデス。道ヲキワメル所ノモノデハ決シテナク世ニ言ワレルゴドウデス。……ナントカ、カントカシテ本當ノ極道ニ近クナリタイト気ニシテイマス。コノ心、体デユルサ

レルデショウカ。……勿論アソブ所マデ乞ウテヨイデショウカ。大ソレテイマショウケレドモ遊ビタイノデス。花深クシテ行跡ナシ。(M283) (下線筆者)

志功の言う「遊ぶ」はまた一段と深い。それは道を極めることであり、こちらの自由になるものではなく許される類のもの、乞うもの、大それたことなのである。自己のすべてを投げ入れて生き、かつ生かされる喜び。「この命ある限り歩いていきたい……その道が、どこまで、つづいているのか、不識のところに、わたくしが、今あっているということの幸せをいそしむばかり」(M281-2)という宇宙的な深い喜び。サンテクス「遊び」はその方向に伸びんとする生きる喜びであり、彼が何よりも貴重としたものだった。そしてこの神を宿す無窮の世界「遊び」は、あらゆる人間が生きる上で本来不可欠のものであり、それを忘却した人生が「牢獄」なのであった。

(4) 遭 難

さて、子供時代の庭園にも遊びにも人はもはや入っていくことはできない。彼のサハラも不帰順砂漠が消滅し、前人未踏の領域がなくなると、「僕らが立ち向かったあの数々の地平線も……消えてしまい」、「神秘」も「魔術」も失われてしまった。では彼は「遊び」を、生きる糧を、どこに見出すのか。その鍵は、『人間の土地』の圧巻である、九死に一生を得た彼のリビアでの遭難を描く七章にある。僚友プレヴォと飛行中、夜の闇と暗雲に包囲され、無線も効かず、「僕らを世界と繋ぐどんな微かな絆もまるでない」、「僕らはあらゆるものの外にある」という状況で、彼は突如激しい衝撃に吞まれる。彼の機は「時速二百七十キロで地面に激突した」(120)のだが、信じがたいことに「砂漠の小高い丘の天辺のゆるい傾斜面に、殆ど切線のように衝突し」、機体が転覆せず砂上を腹ばいのまま突進したため、二人とも奇跡的に生命が助かったのだ。しかし砂漠のただ中、残っていたのはごくわずかのコーヒートとワインだけ。飛行機による搜索は期待できなかった。三千キロに渡って搜索しなければならないのだから。夜が明ければ一面金属の鱗のような砂漠、鎧のように光る世界である。「見渡すかぎり、ただ虚無」(127)である。その日探索に六十キロ以上歩き、機体に戻り、無駄を覚悟で翼の破片を燃やし信号を送る。「人間よ、我らに答えよ！」彼らを待つであろう人々に心の中で彼は叫ぶ、「僕は答えているよ！僕は力の限り答えているよ！」

勇敢で沈着なプレヴォは涙を流し、「僕が泣いているのは自分のことやなんかじゃない」と言う。そうなのだ、自分が死ぬのはまだいいとしても、「向こうで人々が発するであろうあの叫び声、あの絶望の大きな炎……これには堪えかねる。……僕らが駆けつけてやる！僕らこそ救援隊だ！」(130)

プレヴォが残骸の中に一個のオレンジを見つけ、二人は分けあった。「世間の人たちは、一個のオレンジがどんなものだから知らずにいる。」目前の死は確実なのに、彼はその果実に強烈な歓喜を覚える。「僕が手中に握り締めているこの半分のオレンジは、僕の一生の最も大きな喜びの一つを与えてくれる。」二人は巨大な金敷のように照り付けられた砂漠を歩き続け、やがて種々の幻想を見、渇きのために喉が塞がり、彼はどうやら最期が近いことを知る。「さまざまな映像の大河が僕を押し流していく、その行く所に、静かな思いが待っていることが、僕には感じられる。河は深い海の中へ流れ込んで、やがて静かになるではないか。さようなら、僕が愛した者たちよ……君たちの苦痛以外には僕には何の後悔もない。」(149)「僕は、自分の職業の中で幸福だ。……僕には何の後悔もない。僕は賭けた(J'ai joué.<jouer=遊ぶ)。僕は負けた。これは僕の職業の当然の秩序だ。何と言っても僕は、胸いっぱい吸うことができた、爽やかな海の風を。」(150)三日で灼熱砂漠を二百キロ歩いた彼らは、もはや希望どころか悲しみも苦しみさえもなく、ただ機械的によりめく足を進める、倒れるまで進もうと。そのとき彼らは行く手の砂丘の上に一人のアラビア人を見る。こうして彼らは隊商に出会い、生きながらえた。この章は余りの迫真力ゆえに、読み始めると途中でやめることができない。

ここで何よりも読者に感銘を与えるのは、死に臨んだサンテクス的心情だ。「僕には何の後悔もない。僕は賭けた。僕は負けた。これは僕の職業の当然の秩序だ。」「遊び」を生きる者の見事な姿勢である。こうして一旦諦めたとき、二人を救ってくれたアラビアの遊牧者は「神のように」こちらに近づき、「僕らの肩に天使の手を置いた」。そこには「人種もなければ、言語もなければ、差別もない。」彼らは与えられた水を飲み、蘇る命。水こそ生命そのもの、この名状しがたい喜び、蘇る命。この章の決部で彼は救助者に呼びかける、「僕らを救ってくれた君、リビアの牧民よ、君は永久に僕の記憶から消え去ってしまうだろう。僕には君の顔がどうしても思い出せなくなる。君は『人間』(l'Homme)だ、だから君は、同時にあらゆる人間の顔をして、僕に現れる。

……僕の目には君は崇高さと親切に満ち溢れて映る、あらゆる僕の友が、あらゆる僕の敵が、君を通して僕のほうへ向かってくる、ために僕には、もはや一人の敵もこの世界に存在しなくなる。」(157) 死を受け入れ、自我がゼロの極限に近づいていたからこそ、彼を救った一人の人間に彼は人間の本質を直覚しえた。彼にとって、命が助かったことよりもこの発見のほうが重要だった。

人間とは本来崇高なる善であり、友愛によって結ばれている同胞である。ただ個我の牢獄が、我欲、因習、猜疑が、それを隠蔽しわからなくさせているのだ。「僕にはもはや一人の敵もこの世界に存在しなくなる。」彼はいかに人間たちを、「人間 (l'Homme)」を、心底から、全身全霊で愛していることか。これだけの体験に裏づけされた彼の洞察は、手応えのある実体であり、「真実 (vérité)」であった。もう助からないと「一度諦めてしまうと (une fois le renoncement accepté)、僕は平和を知った。」危急存亡のときに初めて、「人は己の真の姿 (soi-même) を見出し」、「僕らの中に、それまで知られずにあった、何ともしれない或る本質的な欲求を満たしてくれる、あの充実感」、「この静謐 (sérénité)」を知る。死を目前にして「渇きに喉を締め付けられながら、あの星の外套の下で、あんなに心が暖かった」のだ。「どうしたら、僕らの心の中の、この一種解放のような状態 (délivrance) を、助成することができるだろうか？」(158) 「人間の本然 (vérité) は、はたしてどこに宿っているのだろうか？」(159) 繰り返し彼が述べてきた牢獄からの解放とは、この「平和」、「真の自己」、「充実感」、「静謐」、「人間の本然」に到達することだった。

(5) 解放の条件

この本の中で、彼は「僧院を選ぶように砂漠や航空路を選んだ人々について語ってきた」が、解放されたいという願望は飛行士ばかりでなく、実は殆どすべての人の中にあると主張する。ただ人を牢獄から解放し「僕らを豊富にしてくれる未知の条件」がないため、「ただ新しい機会がないため、適当な土地がないため、厳しい宗教がないため」(160)、人は自分の中にある偉大さに気づかないだけだ。そういう条件のもとで、ごく普通の人間が「本然」に目覚める例として、彼はスペインのマドリッド戦線で見かけた兵士について、八章の「人間たち」で語っている。

ある攻撃で先頭に立つよう指名された軍曹が眠って

いる。その任務は確実な死を意味していた。時間が来て仲間が彼を起こす様子を、「家畜小屋の気持ちのよい暖かさの中で、お互いに首を愛撫しあう馬たち」に喩え、「僕は一生の間にこれほどやさしいものを見たことがなかった」と書いている。深い平和な眠りから浮かび上がってきた軍曹が「時間かい？」と浮かべた笑みに、サンテクスは感動する。この兵士はもとは貧しい出納係で、戦争や政治には別に興味がなかったが、次第に同僚が志願し、その一人が戦死したと知ったとき、我知らず志願したのだ。普通のサラリーマンとしてサンテクスの言う牢獄に順応していた彼が、今死を目の前にしてこれほど自然に微笑んでいるのはなぜなのか。生死を共にする戦友仲間の絆はとりわけ強い。「憐れみ、それはまだ二人であることだ。まだ別々であることだ。ところが、友情 (relations) に一つの高さがあって」、そこに達すると人は一体となる。「人が解放された囚人のように呼吸するのは、じつにここだ。」サンテクスはそういう「高度な結合」を知った人々を、「同じ樹の枝々」(169)に喩えている。枝々は互いに静かに暖かく受容しあう。死の危険をお互いに、お互いのために引き受けるこのとき、「既に言葉を必要としないあの純一 (unité) を見出す。」この兵士は「自分が完成する気持ちを味わっていた。普遍的なものに加担していた。……愛をもって迎えられていた。」(169)

ここでサンテクスは二つの美しい比喩を用いている。野鴨の群れが空を渡るとき、農家に飼われる家鴨たちは不思議にも不器用に飛び上がろうと試みる。「空の野性の呼び声が家鴨を一瞬渡り鳥に変えたのだ。」家禽小屋しか知らない小さい頭に、大陸的な広がりや沖つ風の素晴らしさが突然入り込んだのだ。また羚羊は、幼いときから飼うと人間によく懐くのだが、成長するとやがて「磁力に引き付けられる」かのように、砂漠の方角に向かってひたすら角で柵を押し続ける。自分では何とも知らず彼らが求めるのは「彼らを完成してくれるであろう広がり (étendue) なのだ。彼らは羚羊になりきって」素晴らしいスピードで逃走し、跳躍したいのだ、たとえそのために天敵に殺されようとも。「その恐怖のみが彼らをして余儀なく自己を超越せしめて、彼らに最大の跳躍を成就させる」(168) ののであったら、死の恐怖が何だというのだ。鴨や羚羊でさえ、閉じ込められている小屋や柵から解き放たれ、野生に帰ることを望む。「自分を完成してくれる広がり」、「普遍への加担」、自己の本然を求めるのは動物も人間も同じだ。「自分になりきる」とは「自己を超越する」ことであ

り、我欲や因習から解放され、大自然あるいは人類共同体という大いなるものの一部として真の自分になることである。

では解放されて本然に向かうにはどうすればよいのか。飛行士として彼が身をもって体験したのは、空から見る宇宙的視野と、生死にかかわる緊急事態が人を解放してくれるということである。砂漠で死を目の前にして、たった一つのオレンジを僚友と分かち合うことに深い喜びを感じるのは、殆ど個我を抜けて友とそしてオレンジとさえ命が響きあうからだ。サハラに不時着した僚友を救助する仕事の大きな喜びに比べると、他の喜びはかりそめとしか思えないと彼が言うのもそのためだ。マドリッドの兵士の場合も同じことである。すると真の自己を見出すには飛行して砂漠に墜落したり、戦争で突撃したり、死ぬ危険を冒さなければならぬのかと読者は思うかもしれない。確かに昔から、自我を打破し大悟するのは大病や事故など危急存亡の時が多く、「諦め (renoncement) を受け入れる」のは生易しいことではない。しかし解放への渴望はもともと人間に内在しているのだ。彼は言う、「僕らの外にあって、しかも僕らの間に共通のある目的によって、兄弟たちと結ばれるとき、僕らは初めて楽に息がつける。……愛するということは、お互いに相見合うことではなくて、諸共に同じ方向を見ることだ」(169)と。自らを解放するには「お互いを結びつける一つの目的」を認識すればいい、それは各自の仕事を通じてするのが近道だろうと。

主義、イデオロギーの相違によって、現に「同じ方向」を見、「一つの目的」をもつ集団間に戦争が生まれているのではないかと反論されるかもしれない。だが、人間は「同じ地球によって運ばれる連帯責任者、同じ船の乗組員だ。……お互いに憎み合うのは言語道断だ」、理屈はそれぞれに自己正当化するだろうが、「本然 (la vérité) というものは、渾沌を作り出すものではなく、……全世界に共通なもの (l'universel) を引き出す言葉なのだ」と彼は言う。(172) 人間というものは解放されたいのだ、自分に充実感を与える目的に打ち込みたいのだ、とサンテクスが語るとき、その対象がファシズムとなりうる懸念を覚える読者は少なくないだろう。しかしファシズムは、自らのために他を圧殺しようとする国家的規模の小我であり、決して「普遍 (l'universel)」ではない。「普遍」はその中に憎むべき敵を含まない。人間は実の所、一人残らず、小我という牢獄から普遍・永遠に向かって解放されたいのだ。まずは「自

分の外にある共通の目的」に向かって歩み出してみることだ、普遍への一步を、地球環境の危機が認識されつつある現代は、共通の目的を持ちやすい時代だといえる。

(6) 住 処

幾度となく星を頼りに飛行した彼にとって、星は普遍・永遠への方向を意味した。「星々の間に自分の道を読み取り」続けてきた彼は、いわば星の視点から深い愛をもって地表を見てきた。彼が砂漠に一人不時着したときのこと、砂丘の頂上で夜目覚めたとき、目に入るのは星空だけで、自分と夜空の深さの間に何一つなかった。彼はその深さの中に墜落するような錯覚を覚え、ついで地球が彼の身体をしっかりと支えているのを感じ、堅実感と安全感を味わった。そのとき彼は心が素晴らしい夢想で満たされるのを感じて、その喜びに身を委ねる。それは松と菩提樹が茂る広い庭園のある、懐かしい子供時代の「愛する古い家」だった。「この家のおかげで、僕は砂漠に墜落した哀れな肉体ではなく」、「僕には見当がついた (je m'orientais)、僕はこの家の子供だった、僕の中にはこの家の匂いの思い出が……廊下の爽やかさが……この家を愛した声々が満ちていた。」その家は砂漠の「千の沈黙を集めて作られた沈黙」(64) から彼を護る。虚空の中に投げ出された彼は、自己のアイデンティティを「この家の子供」に見出して落ち着きと幸福に満たされる。そして永遠に対する憧れの由てくるところ (l'origine) は家でもあったと知る。

その家には巨大な戸棚があり、中には山のような真白のシーツや卓布がしまっていてあった。老いた家政婦がその管理保管をして、「その家の永久性を脅かす摩損の兆し」を速やかに取り除いた。「家のありがたさはそれが僕らを宿し、暖めてくれるためでもなければ、またその壁が僕らの所有だからでもなく、いつか知らない間に、僕らの心の中に夥しいやさしい気持ちを蓄積しておいてくれるがためだ。」(66) 尽きることのない卓布とシーツ（雪白の卓布やシーツは彼の他の作品にもよく登場する）は、暮らしにとって最も重要な食事と睡眠を人に与える、暖かさ、安心、忠実、無償の愛であり、人をそのまま受け入れ包んでくれるものだ。人は子供のようにそれに身を委ねるではないか。この砂漠における家の夢想は単なる子供時代の思い出ではなく、まして幼児期への退行などではない。人間が無条件に自己を委ねることのできる対象の象徴だ。星々の

間に身一つになった彼を、支えてくれるのは地球であり、その中心にある、己を育ててくれた家、愛に満ちた人々であると知って、彼は安んじてそれに身を委ねるのだ。

天には永遠の星々、地には無償の愛の源である庭園と家。この両者の間に彼の言う「遊び」、すなわち真の人生がある。事務的日課、ワンパターンの生活、小我という牢獄ではなく、本当は「遊び」こそ人間の住処なのだ。彼がいかに人々を魅了し、喜ばせるのに巧みであったかは多くの人の語るところであるが、彼は人生の素晴らしいひとときを表現するのにしばしば「祝祭」という言葉を用いた。祝祭とは本来人が神を祭り、自己を投入し、神と交流する時空間である。無窮を含み、神を宿す「遊び」のあるところには、おのずと祝祭が生まれる。ある意味で子供のように正直に「遊び」に住まおうとした彼は、現実世界では不器用なところがあったが、それさえも多くの人に愛されたという。彼は体験を語る以外に牢獄から抜け出す方法を人々に教へはしなかったが、彼の主張を身をもって行動し、遥かに強烈なインパクトを与えた。第二次世界大戦時、フランスがドイツに蹂躪されたとき、戦力の上で到底勝ち目がないにもかかわらず立ち向かう祖国に、彼は飛行機での参戦を願い出た。既に著名であり四十を越えていた彼を、危険から遠ざけようとする周りの努力に執拗に抵抗し、彼は死の危険を十分承知の上で偵察機の操縦士として参加、幾度も危機を脱したが1944年、消息を絶った。

彼の死については様々なことが言われている。派閥争いに分裂するフランスに心を痛めていたこと、どの党派にも組さない彼を中傷する人々に傷ついたこと、身体的に相当のダメージが現れていたこと、人間的な繋がりよりも合理主義一辺倒のアメリカ流の飛行組織に失望していたこと、等々。しかし良心のとがめなく安全なところで執筆に励める境遇にありながら、彼があくまで飛行参加を主張したのは、飛行士たちが最前線で危険に身を晒しているのに自分がその一部とならずにいることはできない、個我を超えて人間の繋がりによって一身を投じたいという願いが根底にあったことは否定できない。こうして「家」に育まれた人間愛ゆえに、永遠という「星」に向かって、彼は姿を消した。2004年初頭、サンテクスが戦時中に行方不明になって六十年後、彼の乗用機の残骸が発見されたとき、世界のニ

ュースに大きく取り上げられたことは、今も彼が人々に「風と砂と星々」の詩を響かせ続けていることを示している。

おわりに

サンテクスは繰り返し読者に呼びかける。小我から解放され、普遍・永遠に向かえ。そこに真の生きる喜び、「遊び」があり、人生の「祝祭」が生じると、それは身近な例で言うと例えばこういうことだ。これなら無条件に愛することができるというもの、これなら自己を委ねられるというものはないか。一つでも心に浮かべば、それはやがて人間の根本的繋がりを信頼していくことに通じる。人々が恐れている死とは、いざ我が身に降りかかればドラマチックに恐怖すべきものではない。それよりも死を前にすると、他の人々への繋がり、愛の深さに圧倒される。だから人生に悔いのないよう十分に人との繋がり、友愛を生きよ、その中で自己の責任を果たせ、そこから永遠への道は開ける。「たとえ、どんなにそれが小さくろうと、僕らが、自分たちの役割を認識したとき、初めて僕らは、幸福になりうるのだ、そのとき初めて、僕らは安らかに生き、安らかに死ぬことができるのだ、なぜかというに、生命に一つの意味を与えるものは、また死にも一つの意味を与えるはずだから。」(176)

(註) () 内の数字は1)からの引用の頁を示す。数字の前にMがつく場合は7)からの引用。訳は一部を除き堀口大学訳による。

文 献

- 1) Saint-Exupéry A : Terre des Hommes, Paris : Gallimard, 2003.
- 2) Saint-Exupéry A : Le Petit Prince, Paris : Gallimard, 1965.
- 3) サン＝テグジュペリ：人間の土地，堀口大学訳，東京：新潮社，1970.
- 4) サン＝テグジュペリ：夜間飛行，堀口大学訳，東京：新潮社，1971.
- 5) サン＝テグジュペリ：戦う操縦士，堀口大学訳，東京：新潮社，1969.
- 6) シフ S：サン＝テグジュペリの生涯，檜垣嗣子訳，東京：新潮社，1997.
- 7) 棟方志功：板極道，東京：中央公論社，1999.
- 8) 矢幡 洋：「星の王子様」の心理学，東京：大和書房，1995.